

イベントレポート

やまがた冬の芸術祭

第44回 クリエイティブカフェ ラヴクラフト&クトゥルー神話を語る Part3

「インスマスの影」を読み解く

開催／2026年1月11日(日)

会場／山形県生涯学習センター「遊学館」ホール

ファシリテーター：黒木あるじ(怪談作家)

登壇者：佐野史郎(俳優)／東雅夫(文芸評論家)／佐藤孝弘(山形市長)

主催／山形市創造都市推進協議会、山形市

協力／「やまがた秋・冬の芸術祭」実行委員会



山形市は2017年、映画分野で「ユネスコ創造都市ネットワーク」に加盟した。文化や創造性の力を生かしながら持続的な発展を目指す都市として、映画にとどまらず文学や芸術など幅広い文化を大切にする「文化創造都市」の実現に向けた取り組みを進めている。その一環として継続開催しているのが、文化をテーマに市民と語り合うトークイベント「クリエイティブカフェ」である。

今回は、これまでもクリエイティブカフェで取り上げている「ラヴクラフト&クトゥルー神話を語る」シリーズの第3弾で、『インスマスの影』をテーマに実施された。怪奇・幻想文学の分野で高い評価を受け、アニメやゲームなど現代の創作にも大きな影響を与えてきたH.P.ラヴクラフトの代表作を取り上げ、その魅力を多角的に掘り下げる内容となった。ゲストには、日本で初めてラヴクラフト作品を映像化した映画『インスマスを覆う影』に主演した俳優・佐野史郎氏、そして幻想文学研究の第一人者である文芸評論家・東雅夫氏が登壇した。

事前申込制で実施され、県内外から多くの申し込みが寄せられた。応募者数は300名を超え、会場は満席となった。幻想文学や怪奇文化への関心の高さとともに、文化創造都市としての山形の取り組みに対する期待の大きさがうかがえる結果となった。

トーク前半では、ラヴクラフト作品そのものの特質について議論が行われた。作品は決して読みやすい文学ではなく、「読む側に強い集中力を求める」一方で、「読後に強烈な印象を残す」「忘れられない体験として心身に刻まれる」といった点が共有された。

人間が本能的に抱く恐怖への関心に真正面から向き合い続けた作家であることも強調され、即時的に消費される娯楽とは異なる文学的価値が確認された。

議論はさらに、日本、特に山形との親和性へと広がった。日本には妖怪文化や八百万の神の信仰、怨霊信仰といった多層的な精神文化があり、山形にも山岳信仰や怪異が身近に息づく土壌がある。人ならざる存在や境界の揺らぎを描くラヴクラフト作品は、こうした文化的背景と響き合うものであり、日本、とりわけ山形はその世界観と高い親和性を持つのではないかと考察が示された。作品が時代を超えて愛好者を持ち続けている背景にも、この感受性の共鳴があるのではないかとという視点が提示された。

また、ラヴクラフト作品およびそこから派生したクトゥルー神話が、小説のみならず映画、アニメ、ゲームなど多岐にわたるジャンルへ広がり影響を与えているのは、原作そのものに強い魅力と求心力があるからこそであるとの意見も共有された。だからこそ派生作品だけでなく、原点であるラヴクラフトの小説を実際に読んでほしいという、作品を愛する登壇者たちの想いも語られた。

ラヴクラフト文学を特定の愛好家のためのジャンルにとどめるのではなく、地域文化や現代社会と接続し得る文化資源として捉え直す視点が示された。文学が土地の記憶や人々の感受性と結びつく営みであることを共有する機会となった。

会場は終始、真剣なまなざしと静かな熱気に包まれた。作品の魅力だけでなく、「なぜ今、山形でラヴクラフトを語るのか」という問いを共有しながら、文学と地域文化を結びつける視点が示されたことは、本イベントの大きな特徴であった。

今回のトークイベントは、文学を入り口にしながら、地域文化や創作の広がりを変えて見つめ直す機会となった。文化を軸に人と人が出会い、対話が生まれる場として、クリエイティブカフェの意義を再確認する一日となった。

